

[要旨]

ピーター・L・バーガーにおける「宗教的ミドルポジション」 の可能性と意義

渡辺 頼陽

1960年代に盛んであった世俗化論は、近年の世界的な「宗教復興」とも評される諸現象により困難となって来ているといえよう。ただ「復興」という語が示すように、一時は宗教の衰退が信憑性をもって感じられる状況が存在したのも、また確かなのであり、現代社会における宗教の位置や役割は決して自明のものではない。そうした状況の中、衰滅か不変か、といった極端な見解を避けつつ大掴みに現代社会と宗教の関係をモデルとして論じることは宗教社会学というディシプリンにおいて重要であろう。

そうした努力を継続している研究者にピーター・L・バーガーがいる。彼は1950年代中頃から、神学的・社会学的論文を発表し始め、当時のアメリカ社会と宗教の関係を論じ、宗教社会学者として世俗化を主張しながら、一方で「信仰者」として社会学的分析に基づく信仰の可能性を論じた。その世俗化論が、宗教理論などと一緒に最も体系づけられ論じられたのが *Sacred Canopy* 『聖なる天蓋』(1967)であるが、実はその2年後の著作から、自身の「世俗化論」への疑義が示され始めており、1971年には、その「世俗化論」は大幅に見直されることとなったのである。以降、バーガーは近代化によりもたらされた「多元性 plurality」に性格付けられた現代社会の「多元的状况 pluralistic situation」における宗教の社会的な変動を論じるようになる。本論文の目的の一つは、バーガーの現代社会と宗教についての分析の変遷を論じることである。

そしてバーガーは、「世俗化論」の見直し以降も、こうした現代社会における宗教の変化を論じながら宗教の持つ可能性についての考察を続けて来ているのであるが、その中でバーガーは現代社会のもたらす〈不確かさ〉と宗教と道德の関連を論じ、「宗教的ミドルポジション」という立場の現代社会における可能性を述べている。これを論じるのが本論文の二つ目の目的である。